

4. 和東町三本柿ノ塚古墳の再検討

菱田 哲郎・諫早 直人・下垣 仁志・横白 彩江・岡崎 壮太

1. はじめに

京都府立大学では2017年より和東町と包括連携協定を結び、和東町史編さん事業への協力をおこなっている。本稿ではその一環で実施した京都大学文学部考古学研究室所蔵三本柿ノ塚古墳出土遺物に対する調査成果を報告する。調査は2024年11月26・27日、2025年1月30日に菱田哲郎・諫早直人・横白彩江・岡崎壮太が実施した。調査にあたっては京都大学文学部考古学研究室の吉井秀夫氏、下垣仁志氏、京都大学総合博物館の村上由美子氏、高野紗奈江氏には大変お世話になった。また下垣氏には鏡について玉稿を賜った。ここに記して感謝の意を表したい。

(菱田哲郎・諫早直人)

2. 古墳の概要

三本柿ノ塚古墳は京都府相楽郡和東町大字門前小字宮野門前44番地にかつて所在した古墳である(図1・2)。和東盆地中央部を北東から南西に向かって流れる和東川の左岸の台地先端部に位置し、標高約146mをはかる。水田耕作により破壊が進み、1958年(昭和33)5月の土取りの際に遺物が出土し、京都大学の樋口隆康氏と西谷真治氏らによって緊急調査がおこなわれた(樋口1961)。その際の報告によれば、樋口氏らが駆けつけた時点では、封土の

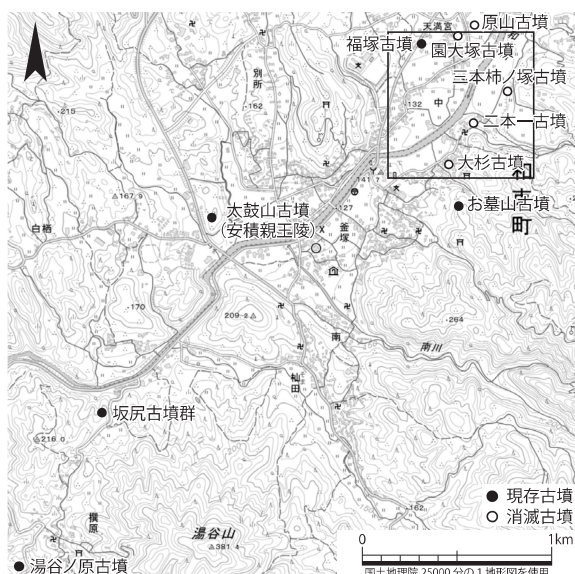


図1 三本柿ノ塚古墳と周辺遺跡 (S=1/40,000)



図2 三本柿ノ塚古墳の位置 (S=10,000)

東側が約7m、中央幅2m、高さ約2.7mが遺存するのみであったが、町役場の記録からもともとは「周囲十間〔約18m〕、高さ一間半〔約2.7m〕」あまりの円墳であったようである。当時古墳周辺には階段状の田があり、周りの急傾斜には茶畑が広がっていたとされ、墳丘が消滅する直前に撮影された写真には、古墳の背後には機械化が進む前の茶畑が写っている(写真1)(樋口1961:図版第一二)。本稿をなすにあたって改めて現地を確認したところ、地表面には古墳の痕跡は確認できなかったが、茶畑が整然とした畝状に変化し、水田が畑となっている以外は当時の地形を比較的留めている(写真2)。

墳丘は、南から北に向かって傾斜する基盤層(硬質黒褐色土層、青灰粘土質土層)に上下二層の盛土を積み上げて築造している(図3)。副葬品とみられる遺物が、基盤層(硬質黒褐色土層)および下層盛土(粘土層)の上面1.8mほどの範囲から出土しており、下層盛土によって傾斜する自然地形を平坦に整えた後に埋葬をおこない、上層盛土(軟質黒褐色土層)を積み上げて墳丘を完成させたようである。埋葬施設については報告では小規模な粘土槨を想定しているが、木棺直葬の可能性も考慮すべきであろう。副葬品は南から鉄鏃・鉄矛・管玉、鉄剣、鏡の順に出土しており、報告では被葬者は南に頭を置いていた可能性を想定している。須恵器については上層盛土中から1点の壺が、数年前に墳丘南西寄りから1点の杯身が出土しており、出土位置からみて埋葬施設内には副葬されなかったようである。(諫早)

3. 出土遺物

(1) 鏡(図4、写真3)

本墳から1面の内行花文鏡が出土している。歴博集成番号の「京都228」にあたる(白石ほか編1994)。樋口報告において、「おそらく船載品であろう」(樋口1961)と位置づけられるが、倭製鏡である。

遺存状況 完存している。遺存状況は良好であるが、鏡面にごくわずかな亀裂が1箇所みられ、これに対応する鏡背面の位置にも亀裂らしき痕跡がみとめられる。色調は漆黒色を呈する。鏡背面と鏡面に緑青がわずかに吹く。鏡背面の内区外周から鈕区にかけて、朱が鮮やかに彩っている。部位を限定した塗朱であろう。



写真1 三本柿ノ塚古墳(樋口1961より転載)



写真2 三本柿ノ塚古墳跡地
(2024年12月撮影)

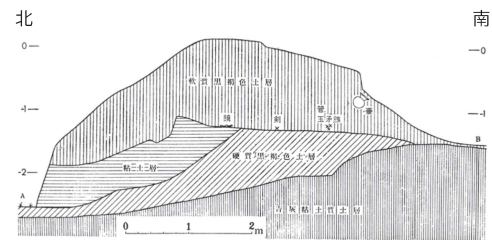


図3 三本柿ノ塚古墳の墳丘(S=1/120)
(樋口1961に加筆)

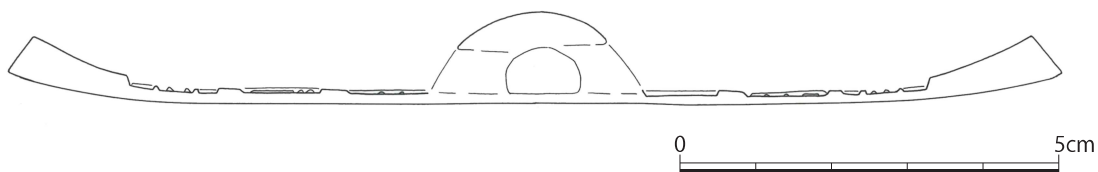


図4 鏡 (S=1/1)

鋳上がり・調整 鋳上がりはきわめて良好であり、いまでも鏡面に顔が映るほどである。文様の鋳出もすこぶるよい。鏡面に円周に沿った研磨痕がわずかに観察される。

法量・重量 面径 13.9cm、鏡背径 13.15cm、内区外周径 10.6cm、内区径 8.2cm である。内区外周と内区の厚さは 0.1 ～ 0.2cm であり、意外に薄い。重量は 330g をはかる。

縁部～内区 縁部は 0.4cm ほどの反りがある。端面幅は 0.5cm をはかる。縁部の頂面は幅広く、ほぼ平直だがごくわずかに匙面状をなす。内区外周は外側から楕歯文帯、斜角雲雷文帯、楕歯文帯で構成される。二帯の楕歯文は別々に施されている。斜角雲雷文は簡略化がかなり

進行しており、円文間に三本の線を配するだけである。内区には平滑な弧文を8単位つらねる。弧文は底部幅3.0cm、高さ1.1cmであり、均等に割り付けられている。弧間には半弧文と、円文から細線を放射させる文様とを交互に配する。

鈕区・鈕 鈕区には平頂素文帯を巡らす。鈕座は四葉文座で、円座と四葉文座に段差がない。四葉文の基底部幅は1.2cm～1.4cm、最大幅は1.8～2.0cm、高さは0.8cmであり、やや不均等である。四葉文間に径0.4cmの円文を配する。鈕が載る円座は径3.1cmをはかる。鈕は半球形を呈し、径2.8cm、高さ1.1cmである。鈕孔は下底面が鈕座面と一致し、底辺幅1.0cm、高さ0.6cmの半円形を呈する。

位置づけ 諸氏の分類に照らすと、Aaイ式（樋口1979）、A類Ia式（清水1994）、I類基本系（林2000）、A式B I類（下垣2011）になる。倭製内行花文鏡は属性が少ないため、編年的な位置づけが難しいが、四葉座の形状や平頂素文帯の存在、弧間文様と斜角雲雷文帯の崩れ度合いなどから、報告者（下垣）の前期倭製鏡中段階古相、すなわち古墳時代前期後葉前半の製作と考えてよい。類鏡としては、奈良県新山古墳から出土した連作の八弧内行花文鏡群などがある。四葉文を配するA式内行花文鏡は50数面あり、中・大型鏡が大半を占めるなかで、本鏡は14cm未満の小型鏡であり、A式の中では4番目に小さい。ただし本鏡は、A式中・大型鏡との共通点が多いので、中・大型鏡の製作工人がそれよりも小さな同種鏡を製作したもののだろう。

同段階のA式B類の内行花文鏡が出土した古墳は、おおむね前期後葉に位置づけられる。ところが、本墳の鏡以外の副葬品は、埋葬施設にともなわない須恵器を別にしても、鉄鉾と鉄鏃は明らかに時期が下る。本墳の埋葬施設は不明瞭で、これらが本当に伴出したのか確定できない。もし伴出していたならば、本鏡は2世紀近くの長期保有を経ていることになる。

（下垣仁志）

（2）管玉（図5、写真4）

管玉が1点出土している。長さ36.3mm、直径11.9mmをはかる。両端からの深度が非対称な両面穿孔で、孔径は両端面ともに直径3.8mmをはかる。孔壁面が平滑であるため、鉄製工具で穿孔したと考えられる。両端面には条線状の痕が明瞭に確認され、管玉形に整形する際に研磨を施したとみられる。

石材については、樋口氏の報告において「灰青色を呈した碧玉製で、一般の碧玉とやや色調を異にしている」と位置づけられている。氏の報告の通り、本例は「一般の碧玉」つまり濃緑色を呈する島根県花仙山産の碧玉とは異なり、灰色味が強い青緑色を呈している。

「碧玉」⁽¹⁾については、藁科哲男氏によって精力的に科学分析がおこなわれ、石材産地を同定する試みが進んでいる（藁科1997）。藁科氏の研究成果は米田克彦氏や大賀克彦氏、谷澤亜里氏らによって考古学的に整理され（米田2000、大賀2001、谷澤2020）、法量と石材の相関関係をもとに「碧玉」製管玉の分類がおこなわれた。先学の研究を参照すると、本例は碧玉ではなく北陸西部系の硬質緑色凝灰岩製である可能性が高い（大賀2013、谷澤2020）。なかでも領域Fとされる太型品にあたり、この規格の管玉は古墳時代前期後半に出現すると指摘されている（大賀2013）。三本柿ノ塚古

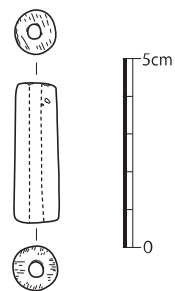


図5 管玉
(S=1/2)

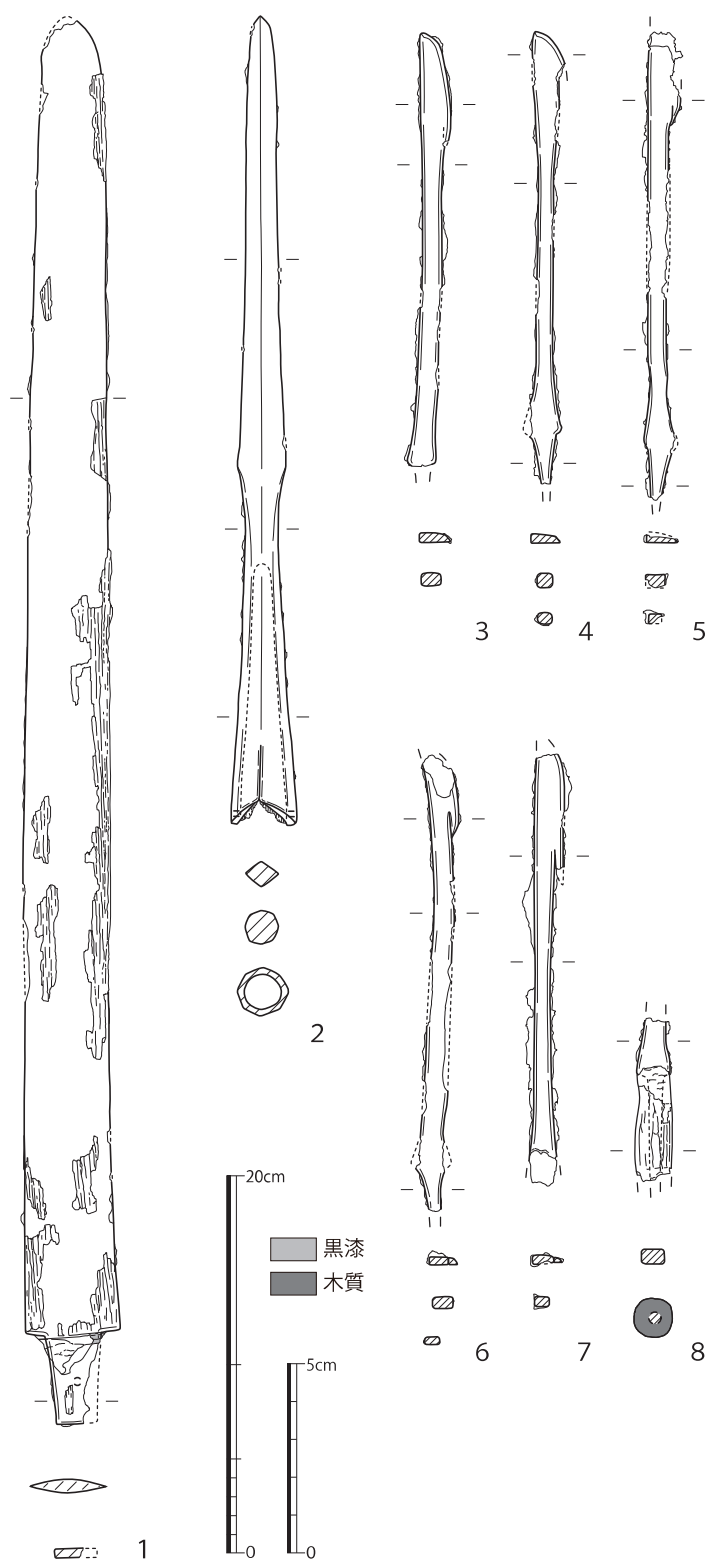


図6 鉄製品 (1・2 : S=1/4、3～8 : S=1/2)

墳出土品の中では鏡とおおむね同時期に位置づけられ、実際に鏡の類例として挙げられている新山古墳でも同様の太型規格の管玉が出土している（谷澤2020）。管玉が本墳から伴出したものであるなら、鏡と玉は一緒に長期保有されていた可能性も考えられる。（横白彩江）

(3) 鉄製品

①鉄剣（図6-1）

切先が欠けているもののほぼ完形の鉄剣である。残存長74.8cm、身部長70cm、身部最大幅（関部幅）5.0cm、厚さ0.8cm、茎部長5.0cm、茎部最大幅2.9cm、厚さ0.5cmをはかる（劣化が進んでおり、木箱に保管されている状況で観察をおこなったため、計測値については報告書の記載に従った）。関は角関で、一文字尻の茎部は身部に比して著しく短い、端部にまで一様な錆が覆っており、少なくとも近年欠損した痕跡は確認できない。身部は断面菱形、茎部は断面長方形で、茎部よりも身部をやや厚くつくる。肉眼観察による限り、茎部中央には目釘孔があるようにもみえるが判然としない。身部、茎部いずれも長軸方向に並行する木質が付着しており、前者は鞘材、後者は把材とみられる。茎部の関付近には把材と思しき木質とは異なる有機質が付着しており、表面には一部黒漆らしき痕跡も認められる。遺存状態が悪く確

定することは難しいが、位置からみて把縁装具の可能性が高い。

本例は池淵俊一氏分類の「長剣直茎（短）グループ」に該当し、氏は弥生時代の鉄剣の伝統を継承し、「4世紀代〔古墳時代前期：筆者補〕でほぼ消滅する」と述べる（池淵 1993：52頁）。たしかに本例のような、ライアン・ジョセフ氏の広身、短茎の「厚菱長剣」は、弥生時代後期から認められるが（ライアン 2021）、刃関双孔など弥生時代にまで遡る確実な特徴は確認できなかった。ここでは三本柿ノ塚古墳から出土した鉄剣が、上述の銅鏡や管玉と同じく、ほかの鉄製品や須恵器に比して、古相を示すことを指摘するに留めておきたい⁽²⁾。なお、池淵氏は身部長 37cm、ライアン氏は 40cm 以上のものを長剣としているが、身部長 70cm を越えるものは極めて少なく（池淵 1993：第 1 図、ライアン 2019）、長剣の中でも優品であるといっていだろう。

②鉄鉾（図 6-2）

長さ 19.0cm、最小幅 1.7cm、最大幅 3.5cm をはかる（劣化が進んでおり、木箱に保管されている状況で観察をおこなったため、計測値については報告書の記載に従った）。身部は長穂で、細身であるが断面菱形の重厚なつくりで、関部をもつ。袋部は旧報告において断面八角形を呈すると指摘されている。銹化のため判然としない部分はあるが、現在も長軸と併行する稜線をいくつか確認することができ、少なくとも多角形であった可能性は高い。袋部内面には柄に由来するとみられる長軸と併行する木質が付着している。袋端部は山形挟り式で、袋端部付近には目釘孔の痕跡が認められ、長軸と直交方向の木質が付着していることから木製目釘の可能性が高い。

本例のような「多角形袋式鉄鉾」は、高田貫太氏の鉄鉾編年のⅡ期～Ⅲ期に類例があり（高田 2014）、身部が厚手で、狭鋒化が進みつつも明瞭な関部をもつ本例については高田氏のⅡ期、富山直人氏の鉾 2aⅡ期（富山 2017）、すなわち TK208 型式期に上限年代を求められる。高田氏のⅡ期の「多角形袋式鉄鉾」は、熊本県江田船山古墳、和歌山県大谷古墳、埼玉県埼玉稲荷山古墳をはじめとする古墳時代中期後半の日本列島各地の有力古墳から出土しており、周辺では京都府宇治二子山古墳に類例がある。「多角形袋式鉄鉾」は、朝鮮半島の大加耶（や百濟）において「威信財的な性格」を有していた鉄鉾とされ（高田 1998・2014：122-123 頁）、本例についても大加耶（百濟）系の鉄鉾として理解することが可能である。（諫早）

③鉄鏃（図 6-3～8、写真 5）

1960 年の樋口康隆氏の報告では「破片をふくめて二三本あり、うち六本はほぼ完形である」とされ、そのうち 1 点が図化されている（樋口 1960）。鉄鏃群は木箱の中に保管されていたが、保存状態は良好とはいえず、各資料・破片の接合作業は困難であると判断した。木箱内での位置関係を崩さないように留意しつつ、現存する資料数の確認、一部資料の図化および写真撮影、重量計測をおこなった。頸部の本数から少なくとも 21 本の現存を確認したが、遺存状態を考慮し、刃部や関部の形状を確認できるもの 5 点、関部から矢柄にかけて良好に残存するもの 1 点を図化することにした。

鉄鏃群はおおよそ同形・同大の長頸片刃鏃から構成されており、刃部形状が確認できた資料にはすべて腸挟が備わることを確認した（表 1）。水野敏典氏分類の長頸片刃箭式、川畑純氏分類の長頸 C（長頸腸挟片刃）に該当する（水野 2003、川畑 2009・2015）。関部（茎関）は台

表 1 鉄鏃観察表

図番号	残存長	刃部長	頸部長	茎部長	矢柄長	刃部幅	頸部幅	関部幅	茎部幅	刃部厚	頸部厚	茎部厚	重量
3	(11.50)	(2.90)	9.00	—	—	0.80	0.55	0.70	—	0.25	0.35	—	7.71
4	(11.95)	(2.05)	(9.30)	(1.35)	—	0.75	0.40	(0.80)	0.35	0.22	0.40	0.30	8.50
5	(12.40)	(2.45)	9.05	(1.65)	—	0.80	0.50	(0.80)	0.35	(0.20)	(0.35)	0.25	7.98
6	(12.10)	(2.20)	9.50	(1.10)	—	0.75	0.55	(0.75)	0.40	0.20	0.30	0.20	7.23
7	(11.45)	(3.05)	(8.95)	—	—	0.80	0.40	—	—	0.25	0.25	—	9.84
8	(4.30)	—	(1.55)	(2.75)	(3.10)	—	0.60	0.90	0.30	—	0.40	0.30	5.60

長・幅・厚の単位はcm、重量の単位はg。()は欠損部位、—は計測不能を示す。

なお幅・厚の数値に関しては、刃部・頸部・茎部は断面形状を図化した箇所、関部は最大値をとる箇所計測している。

形状を呈しており、膨らんだ関部は茎部にかけてすぼまるが、側面から観察すると頸部と茎部の間に段は確認されない。また刃部の断面形状をみると片面の刃部縁のみが研ぎ出されていることが見て取れる。矢柄が残存する資料(図 6-8)は、ソケット状に加工した矢柄に鏃の茎部を挿入した後、口巻により固定しているようである。口巻には何らかの有機質素材が使用されており、樹皮や糸ではないと見受けられるが、残存状態が悪く判然としない。矢柄の先端形状をみると、鏃と矢柄の間に段ができないように調整がなされており、具体的な加工痕跡は見受けられないが、矢柄先端の全周に削りを施したと推察される。この先端形状は川畑氏分類の円錐台形に当てはまる(川畑 2010・2015)。

最後に鉄鏃の形状から、鉄鏃群の年代について考察しておきたい。長頸片刃鏃は古墳中期後半に深い腸袂を有するものが出現し、中期後葉～後期前葉にかけて腸袂が浅くなり形状の省略化が進むというのは各論者の共通見解といってよい(鈴木 2003、水野 2003、川畑 2009・2015、尾上 1993・2024)。また水野氏は中期 5 段階(おおよそ TK23・TK47 併行期)の長頸鏃について「頸部付近で緩やかに幅を増す台形関 a が増える」と述べている(水野 2003)。三本柿ノ塚出土品は深い腸袂と台形状の関部を有していることから、古墳時代中期後葉～末、すなわち TK208～TK47 型式期に位置づけることが可能である。(岡崎壮太)

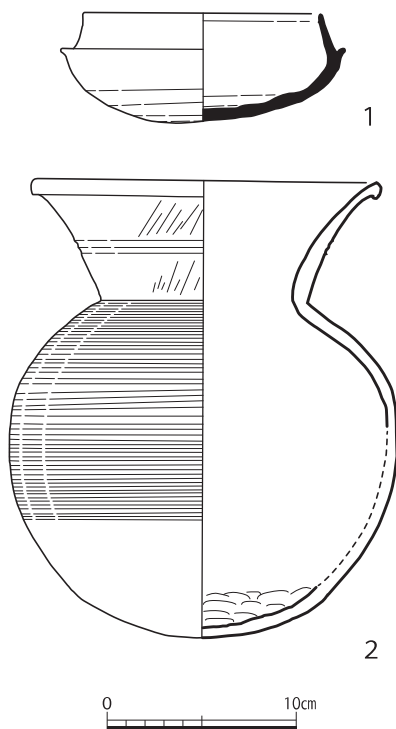


図 7 須恵器 (S=1/4)

(4) 須恵器(図 7、写真 6)

第 2 節で述べたように、報告書によると上層盛土中から 1 点の須恵器壺が出たことがわかり、同じく「数年前に封土の南西寄りから須恵器杯身一個が出土し」と記されている。両者の位置関係は不明であるが、壺も南方からの出土であることから、比較的近くに置かれていた可能性が考えられる。いずれにしても棺外の遺物ということになる。壺(図 7-2)は広口壺であり、口径 18.2cm、胴部最大径 20.5cm 高さ 24.1cm をはかる。長い口頸部はなかほどに二条の沈線を施し、その上下にはそれぞれ板を斜めに押し当てて施文としている。外反状にひらく口縁部の端部は玉縁状を呈する。胴部外面には平行タタキの痕跡がみられ、上半はそののちにカキ目が施される。また、底部内面に棒状のものを押し当てた痕跡が残る。色調は青灰色で断面は赤紫色を呈し、焼成

は良好である。杯身（図 7-1）は口径 12.5cm、最大径 15.0cm をはかり、高さは 5.9cm である。体部が屈曲し、また長い立ち上がりの先端に面をつくる。底部外面は回転ヘラ削りが施され、その際のロクロの回転方向は時計回りである。こうした特徴から陶邑 TK23 型式ないし TK47 型式に併行すると判断できる。色調は灰色で、焼成は良好である。この 2 点が古墳に伴う確実な資料であり、年代的にも同時期と考えて問題がない。京都大学にはさらに破片が数点同じ箱に保管されている。その中に器台の脚部の破片があり、二条の一对の突帯で区画される間に波状文が施されている（写真 7）。注記はないが、器台は広口壺が器台と対になることが一般的であることをふまえると、当古墳の副葬品であった可能性も想定できる。（菱田）

4. おわりに

三本柿ノ塚古墳については樋口隆康氏による報告以来、鏡の伝世事例の一例として知られてきた⁽³⁾。今回の再検討の結果、鏡の年代自体は下降し、漢鏡ではなく倭製鏡であることが明らかとなったが、それでも須恵器などから想定される古墳の築造年代よりも遡る。また管玉や鉄剣についても須恵器出現以前の特徴をもつことが明らかとなった。鉄鉾や鉄鏃の年代的位置づけは須恵器の年代的位置づけと親和的であり、古墳時代前期に遡る、ないし遡る可能性のある古相の一群（銅鏡、管玉、鉄剣）と、古墳時代中期末に位置づけられる新相の一群（鉄鉾、鉄鏃、須恵器）に明瞭にわかれることが浮き彫りとなった。

埋葬施設が粘土槨であったのか、木棺直葬であったのかはわからず、埋葬施設が複数あった可能性も否定できないものの、報告されている出土状況が確かであれば、少なくとも須恵器以外については同一の埋葬に伴う副葬品とみるのが自然である。古墳の築造年代については新相の一群から導き出される古墳時代中期末、すなわち TK23・47 型式期と理解するのが妥当であろう。古墳時代における鏡の伝世事例は枚挙に暇がないが、管玉や鉄剣が‘セット’で伝世した可能性をもつ事例は寡聞にして知らず、今後の検討課題としておきたい。いずれにせよ三本柿ノ塚古墳については、和束川の対岸に位置し、横矧板鋌留短甲などの豊富な副葬品が出土した原山古墳とともに、和束盆地における古墳築造の嚆矢として位置づけることが可能である。

なお、三本柿ノ塚古墳の土器や玉類は同じ木箱に収めて保管されていたが、そこには福塚古墳と注記された円筒埴輪の底部片も納められていた（写真 8）。以前に京都府立大学の調査で採集・報告した埴輪（鈴木ほか 2021）と比較しても同じ古墳と考えて問題ない資料である。実際、報告においては福塚古墳についても記述があり⁽⁴⁾、三本柿ノ塚古墳の調査時においてもよく知られた存在であったことがわかる。（菱田・諫早）

註

- (1) 弥生・古墳時代の管玉に用いられる緑色を基調とする石材をまとめて「碧玉」と呼称することがある（大賀 2006、谷澤 2020）。
- (2) 本資料の位置づけにあたっては、ライアン・ジョセフ氏、齊藤大輔氏、金宇大氏より様々なご教示をいただいた。深く感謝したい。
- (3) 「本墳の営造年代は須恵器の示す時期にあたるとみなされ、ひいて内行花文鏡は伝世したことになる。しかし本鏡には一般に伝世を実証するといわれる手なれのあとはみとめられない。伝世鏡の用いられかたが

必ずしも一律でなかったことをしめす資料となるであろう。」(樋口 1961 : 35 頁)

- (4) 「「福塚」という小塚があり、(町役場の記録によれば、周囲二十間、高さ約二間とある) いま、封土の北側が削られて、内部に築かれた石室の側面が一部露出している。ここから出土したと称する鉄刀一本が役場に保存されており、長さ七二センチの直刀である。」(樋口 1961 : 29-30 頁)

参考文献

- 池淵俊一 1993 「鉄製武器に関する一考察—古墳時代前半期の刀剣類を中心として—」『古代文化研究』第 1 号 島根県古代文化センター
- 大賀克彦 2001 「弥生時代における管玉の流通」『考古学雑誌』第 86 巻第 4 号
- 大賀克彦 2006 「「碧玉」製玉類の生産と流通」『季刊考古学』第 94 号
- 大賀克彦 2013 「玉類」『副葬品の型式と編年』(古墳時代の考古学 4) 同成社
- 尾上元規 1993 「古墳時代鉄鍬の地域性—長頸式鉄鍬出現以降の西日本を中心として—」『考古学研究』第 40 巻 1 号
- 尾上元規 2024 「鉄鍬」『中期古墳編年を再考する』六一書房
- 川畑純 2009 「前・中期古墳副葬鍬の変遷とその意義」『史林』第 92 巻第 2 号
- 川畑純 2010 「古墳副葬鍬の生産・流通・保有・副葬」『古代学研究』185 号
- 川畑純 2015 『武器が語る古代史—古墳時代社会の構造転換』京都大学学術出版会
- 清水康二 1994 「倣製内行花文鏡類の編年—倣製鏡の基礎研究 I —」『橿原考古学研究所論集』第 11 吉川弘文館
- 下垣仁志 2011 『古墳時代の王権構造』吉川弘文館
- 白石太一郎・設楽博己(編) 1994 『国立歴史民俗博物館報告』第 56 集(弥生・古墳時代遺跡出土鏡データ集成)
- 鈴木一有 2003 「中期古墳における副葬鍬の特質」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第 11 集
- 鈴木康大・廣瀬覚・菱田哲郎 2021 「和束町福塚古墳の埋葬施設と埴輪」『京都府立大学文学部歴史学科フィールド調査集報』第 7 号
- 高田貫太 1998 「古墳副葬鉄鍬の性格」『考古学研究』第 45 巻第 1 号
- 高田貫太 2014 『古墳時代の日朝関係—新羅・百済・大加耶と倭の交渉史—』吉川弘文館
- 谷澤亜里 2020 『玉からみた古墳時代の開始と社会変革』同成社
- 富山直人 2017 「近畿地方出土鉄鍬の基礎的研究—古墳時代中期を中心として—」『考古学研究』第 64 巻第 1 号
- 林正憲 2000 「古墳時代前期における倣鏡の製作」『考古学雑誌』第 85 巻第 4 号
- 樋口隆康 1961 「和束三本柿ノ塚」『京都府文化財調査報告』第 22 冊 京都府教育委員会
- 樋口隆康 1979 『古鏡』新潮社
- 水野敏典 2003 「古墳時代中期における鉄鍬の分類と編年」『橿原考古学研究所論集』第 14 八木書店
- 米田克彦 2000 「碧玉製管玉の分類と碧玉原産地」『古代古備』第 22 集
- ライアン・ジョセフ 2019 「古墳出現期における刀剣類の生産と流通の二相—古備地域を中心に—」『日本考古学』第 49 号
- ライアン・ジョセフ 2021 「弥生時代の北部九州における鉄剣生産の再検討」『考古学研究』第 68 巻第 1 号
- 藁科哲男 1997 「宇木汲田遺跡出土のヒスイ勾玉、碧玉製管玉の産地分析」『佐賀県立博物館・美術館調査研究書』第 22 集



写真3 鏡



写真4 管玉 (S=1/2)



写真5 鉄鏃 (S=1/2) (番号は図6に対応)



1



写真7 須恵器 器台脚部



2

写真6 須恵器 (番号は図7に対応)



写真8 福塚古墳採集の円筒埴輪

編集後記

余裕をもって仕事に取り組みたい。一つ仕事が終わる度に今度こそはと思うが、今回も果たせなかった。文字通りバタバタ。年末から長い師走が続いている。一つの救いは、春からのフィールドワークに始まり、冬の集報に終わるこの一連の営みが、10号を越え、府大歴史学科の伝統として根付きつつあること。フィールドをご提供いただいた関係各所のご厚意に深く感謝申し上げたい。

なお本書の組版作業は、歴史学科文化遺産学コースの合同実習メニューとして学部生が Adobe 社の InDesign を利用しておこなっているが、もちろんそのままでは本にはならない。一書にまとめるにあたって力を尽くしてくれた大学院生の頑張りにも深く感謝したい。(い)

京都府立大学文学部歴史学科

フィールド調査集報 第 11 号

編集・発行 京都府立大学文学部歴史学科

〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町 1-5

発行日 2025 年 3 月 31 日

印刷 株式会社 北斗プリント社

〒606-8540 京都市左京区下鴨高木町 38-2
